



# 私の工大生活を振り返って。

## ～米沢ゼミで学んだこと、体験したこと～

東芝メディカルシステムズ株式会社

営業担当・課長職 松下 剛太 (広島工業大学電気工学科 昭和55年卒)

### ●米沢ゼミとの「運命的？」な出会い。

学籍番号512107。今でもこの番号がすぐに思い浮かぶほど、私にとって広島工大で過ごした4年間は、かけがえのない財産になっています。電気工学科を選んだ理由は、幅が広くて奥が深いと思ったからです。家電や空調設備といった身近なものから、プラントや発電所まで、どんなジャンルでも知識と技術が生かせる。そのぶん、自分の将来の可能性も広がるのではないかと考えたんですね。そしてゼミは、生体情報の米沢先生の研究室に所属。これは、まったくの想定外というか、運命的な出会いというか、実は最初は米沢ゼミに入ろうとは思っていませんでした。当時の(今でもそうですが)米沢ゼミは朝から晩まで、いや、翌朝まで研究に取り組んでいる猛烈な研究室として学内では有名。どのゼミに入ろう

かと悩んでいた私は友人と相談し、「キツそうなゼミから順番に訪問し、話を聞きながら自分に合った研究室に決めよう」と、最初に訪問した(つまり一番キツそうな)のが米沢ゼミでした。軽い気持ちで訪問したのですが、「まずこれを読みなさい」と、先生からいきなり手渡されたのは、英語で書かれた自作の論文。辞書を引きながら読んでいるうちに、他のゼミを訪問する時間もなくなり、いつの間にか、米沢先生の研究室で実験に取り組んでいました。

### ●研究成果をアメリカの雑誌に発表。

動機は何となく不純でしたが、ゼミに入るとすぐ、研究に没頭しました。何と言っても米沢先生が素晴らしかった。大学での日々の教育はもちろん、ご自身の研究をパワフルに進めていく、そのバイタリティに触発されま

した。先生に勧められた論文や資料は国の内外を問わず、ほとんど読破。ゼミで主に取り組んだのは、心拍計づくり。1拍ごとに即時的に心拍を測れる精度の高いものを開発しようと、先生に師事しながらも試行錯誤を重ねました。実験に次ぐ実験の日々を過ごしながら、1分間に1拍から1023拍まで測れる測定器をついに完成。当時平均的な測定率だった4%が0.06%にまでなったのですから、画期的とも言える成果でした。そして、この研究成果は、大学の卒業研究の論文だけでなく、先生との連名でアメリカの専門雑誌にも発表。掲載された雑誌は、今に至るまで私の宝物です。

こうした研究のやり甲斐はもちろんですが、ゼミでは仲間たちとフランクなつきあいができた点も良かったですね。忙しい米沢先生の代わりに、後輩にアドバイスしたり、先輩の実験をフォローしたり。みんなで協力しながら、研究に取り組む楽しさをたっぷり味わえました。

### ●レジデンスとして研究。そして就職。

卒研終了後、先生の勧めで大阪の「国立循環器病センター(NCVC)」のレジデンスとして半年間の研究を行ったこと。それも大きな思い出です。ここでは、心機能を測定する装置開発に従事。毎日が朝から晩まで研究漬けで、金曜日は必ず徹夜、という日々でした。有り難いことに、ここでの成



米沢ゼミの仲間たちと(当時)

果も心臓学会へ論文として発表させていただきました。

当時、工大に大学院があれば、進学したかもしれませんね。NCVCから帰った時点では、特に就職を急ぐつもりはなかったのですが、米沢先生から「会社見学に行ってみよう」とご紹介いただいたのが東芝メディカル株式会社(当時)だったのです。就職活動の練習をするくらいの軽い気持ちで行ったのが良かったのでしょうか。思いがけず試験や面接を受けることになり、役員面接では「柔道をやった君は、お酒は強いのか?」の質問に、「ミドル級です」と答えたら大爆笑。そのおかげかどうかは分かりませんが、後日、採用通知が届きました。米沢ゼミとの出会いといい、就職といい、まるでそれが宿命であるかのように、進路が決まりました。

### ●新学科「健康情報学科」に期待します。

東芝メディカルシステムズ株式会社は、最先端の画像診断技術と情報技術を融合させ、医療ソリューションに取り組む企業。X線やCT、US、MRIなどの医療機器の開発から販売、保守まで扱っています。私は販売職として、広島市内を中心に250～260

件の医療機関を担当。ただ機械を売るのではなく、医師やパラメディカルスタッフ(技師など医師以外の医療従事者)等のニーズを汲み取り、より充実した医療環境づくりにつながるような提案をいつも心がけています。私が提案した装置やシステムが機能し、患者さんの健康回復に役立ったと聞いた時は本当に嬉しいです。人の健康や生命を支える医療機器を扱うこの仕事の責任の重さと、それゆえのやり甲斐の大きさを感じながら日々、業務に取り組んでいます。広島工大では来春から健康情報学科が新設されるとのこと。私の仕事にも通じるジャンルだけに、とても期待しています。

恩師である米沢先生もこの学科で「生体情報」を教えられると聞いています。健康な社会づくりを担う若くて新しい力が育っていくことを願ってやみません。

※この文章は、松下剛太さんへのインタビューをもとに、談話として再構成したものです。



大学4年生の頃 右が松下氏